

※5・20MAキック後楽園大会の記事は、P116~117にも掲載してあります



MA日本キックボクシング連盟
最強を求めて!! 世界制覇
5月20日●東京・後楽園ホール

お互い譲れぬものがある。MAと全日本の現役ライト級王者同士との対決を目の当たりにして、そう思わざるをえなかった。

試合が動いたのは2R。井上が組んでくるところに、金沢は右フックを合わせていく。それでも強引に組んできた井上に対して、金沢は離れた瞬間を見計らって右ハイ一閃。この一撃がもの見事に相手のアゴ先と首筋をとらえた。

その倒れ方から察すると、すぐに意識を回復することは不可能に思われた。

だが井上はすぐに立ち上がった。だが、まるでゾンビのように。

「あそこで立って来たのは王者としての意地」と金沢は振り返る。

「あのハイをもらって立ち上がってきたんだから、もう絶対に倒れないだろうと思いましたよ」

そこで金沢は作戦を変更。試合終了まで持ち前の技術で、井上を翻弄しようと思っ掛けた。

「理由? 戦前、4Rで金沢の動きが落ちるから、それから井上のヒジを食らってKO負けする。そういう予想が多かったんで、だったら5Rまでやってやるよという気持ちになったんですよ」

井上に意地があれば、金沢にも意地があった。これだから現役王者対決は面白い。両者の気持ちが



○1Rから激しくやり合う両雄。最初にプレッシャーをかけていたのは井上の方だった。これも全て金沢の作戦通りだったのか

○右前蹴りを食らいながらも、井上は金沢の蹴り足を上に払ってスリップダウンを奪った。2R終了間際の攻防だ



合致すれば、試合はほとんどスリリングな方へ転がっていく。

果たして金沢の縦横無尽な動きに、最後まで井上は自分のベースを揺むことができなかった。左ミドルやヒジ打ちを打つても、距離が合わない。得意の首相撲やサバ折りも、離れ際の攻撃を警戒しすぎたのか、相手のスタミナを奪うまでには至らなかった。

これで金沢は対抗戦5連勝。威信や誇りを懸けた闘いで、いつも以上の好勝負を繰り広げることができるのだから、本当に頼もしい。私は金沢を「離れ際の魔術師」と命名したい。(布施)

敗れた井上哲はMA日本ライト級王座を返上! さすが金沢、離れ際の右ハイで 現役王者同士の一騎討ちを制す



●メイン/M.A.全日本対抗戦/63・5・契約3分5R前15試合
(全日本ライト級王者)

○金沢久幸(全日本TEAM1所属、63・3・29歳)
(判定3-0) ※採点11:50:47、50:48、50:47

●井上 哲(山本ジム所属、62・9・24歳)
(MA日本ライト級王者)
※井上は2R、右ハイキックでダウンあり

○試合後、勝利者賞のメダルを首に下げながら微笑む金沢。最近スカッとした勝利がなかっただけに、再び上昇気流に乗るか

○勝負の決め手となった金沢の右ハイ。井上の頭の歪み具合から察すると、完全に急所をとらえた一撃だ。立ち上がってきたことが不思議。試合後、井上は周囲の制止を振り切って、MA日本ライト級王座の返上を申し出た

○チャンスがあれば、ヒラリと宙を舞う。そうした金沢の基本的な姿勢は、王者同士の一騎討ちでも変わることがなかった

○この日は右のボディストレートと右アッパーが目立っていた金沢。確実にダメージを与えていた

○試合後、金沢の控室を井上が電報。「負けました。実効です。年齢的には僕の方が上だけど、金沢選手を目標にこれからも頑張りたい」と頭を下げた

